

5分後に
世界のリアル

ぎょうてん
仰天！世界のアタリマエ

藤田晋一・文



世界は不思議に満ちている。

世界は驚おどろきに満ちている。

世界をか知ることは

世界は不思議に満ちている。世界は驚おどろきに満ちている。世界を知ることにはリアルを知る
ことであり、世界の本当の姿すがたを見つけることでもある。さあ、未知の扉しじまをあけてみよう。

世界の本当の姿すがたを

見つけよう。あ

さあ、未知の扉しじまをあけてみよう。





世界のお正月
新年が四度もやってくる国がある！ 8

世界のお盆
無数のランタンが舞う幻想的な夜空！ 16

世界の収穫祭
トマトの投げあいはエキサイティング！ 23

世界の仮面祭り
鬼か精霊か？ 怖くて楽しい仮面たち！ 31

世界の成人式
大人になるための決死のジャンプ？ 39

世界のクリスマス
黒いサンタクロースがやってくる!? 46

世界のプレゼント
ゆりの花は縁起が悪く、時計は別れをよぶ？ 54

世界のお葬式
歌えや踊れ！ 葬る儀式はエンタメだ！ 60

世界のお墓
土と石と風と鳥と…こんな墓地で眠りたい！ 68

世界のあいさつ
外国語で「おはよう」と言ってみよう！ 75

世界のしぐさ

ピースサインをすると怒りだす国がある！

83

世界の鬼ごっこ

追うのはオオカミ、ハンター、それとも親!?

90

世界の学校

どんな給食が食べられているの？

97

世界の国旗

意外に奥深い国旗のヒミツ！

104

世界のトイレ

ドアも仕切りもないトイレがある！

111

世界のお風呂

みんなはお湯になんてつかからない！

120

世界の家 (アジア)

自在に組み立てと分解ができる家がある？

127

世界の家 (ヨーロッパ・アフリカ・南北アメリカ)

芝生におおわれた三角屋根の家って？

135

世界の鉄道

市場にも砂漠にも線路はつづく！

144

世界で通じる日本語

外国の人にも、そのまま伝わるかも!?

151

おわりに

158

歌えや踊れ！ 葬る儀式はエンタメだ！



お葬式（葬儀）は、死者を葬る儀式のこと。だが、遺体を埋葬するためだけの儀式ではない。参列する人々は、故人の死を悲しみ、喪に服している人をなぐさめ、死者の冥福を祈る。お葬式は、死者のためのものであり、残された人々のためのものである。

死んだら人はどうなるのか？

死んだら魂はどこへいくのか？

国の文化によっても宗教によっても、死に対する考え方は大きくちがう。そのため、死者のお見送りの方法も多種多様にあるのだ。

たとえば、キリスト教では、人は死んでも、肉体が減じるだけで、いずれ復活する

と考えられている。キリスト教の最大教派のカトリックでは、生きているあいだの悪いおこないは、罪を告白し、悔いあらためる懺悔によってつぐなわれるとされる。そのため、通常は亡くなる前に神父がおとずれ、その人の臨終をみとる。お葬式は教会で盛大に執りおこなわれ、聖書の朗読や神父の説教、聖歌の合唱があり、死者のために祈りがささげられる。

カトリックから分離したプロテスタントでは、人が死後にどうなるかは、すべて神にゆだねられるとされている。罪のゆるしは神から直接受けることができるため、牧師への懺悔はない。お葬式は死者のためではなく、遺族をなぐさめるためのものと考えられ、教会か墓地で比較的簡素にいとまれる。

さて、ちょっと不思議なお葬式の話を二つ紹介しよう。

まずは、アフリカの西部に位置し、人口の多くがキリスト教徒であるガーナから。

この国の富裕層のお葬式は、三日がかりでおこなわれ、飲んで、食べて、歌って、踊るもの。まるでパーティーのようなお祭りさわぎの超にぎやかなお葬式だ。日本人が



ガーナの歴史博物館に展示されているユニークな棺桶。動物や乗り物を模した形をしている。

イメージしている、静かでおごそかなお葬式とは真逆のものだ。

ガーナでは、人が亡くなると、遺体はすぐに冷凍保存される。お葬式の準備に一月以上かかるからだ。長ければ三か月かかることもあるらしく、お金も多くかかるので資金調達がないと、へんだという。

特徴的なのは棺桶だ。もちろん一般的な形状のものも使われるが、専門の棺桶職人による特別な棺桶が用意されることもある。職業や趣味、夢など、亡くなった人の人生に関連する何かをモチーフにして製造されるという。たとえば、生前に漁師だったなら魚の形の棺桶が

くられ、パイナップル農家ならパイナップルの形をした棺桶がつけられる。ほかに牛や鶏、ライオン、とうがらし、ギター、スニーカー、飛行機など、ありとあらゆるものが棺桶のモチーフになる。生きているあいだに棺桶の形状を決めて、事前にたのんでおく人もいるらしい。ガーナの棺桶は、アート作品としての評価も高く、棺桶を展示する美術館もあるほどだ。

ガーナのお葬式では、盛り上げるための「泣き屋」の存在も重要だ。泣き屋の女性たちをよんで、葬儀中に泣き叫んでもらうのだ。泣き方がはげしいほど、故人がどれだけ高い名声を得ていたか、周囲からどれだけ愛されていたかをしめすことになる。プロの泣き屋はさまざまな泣き方をする。泣きわめいたり、泣きながら歩いたりすることはもちろん、よるめきながら泣く、地べたにころがりながら泣くといった、さまざまな泣きのテクニクを使い分けるらしい。

お葬式には、泣き屋にくわえて「担ぎ屋」たちも登場する。こちらは棺桶を担ぐ男性たちだ。棺桶を担ぐなんて、力があればだれでもできると思うかもしれない。しか

し、プロの担ぎ屋たちは、お葬式の日、特別なテクニクを披露してくれるのだ。

お葬式は金曜日の夜からはじまる。死者は広場に運ばれ、参列者たちは死者に別れをつけ、泣き屋の女性たちがさまざまな泣きのテクニクを見せる。そして、大音響で陽気な音楽が流されると、参列者たちは、リズムカルな音楽にあわせて、朝まで踊りつづけるのだ。もちろん、泣き屋たちも踊りにくわわる。

翌朝、担ぎ屋の男性たちの登場だ。彼らの役割は、死者をおさめた棺桶を広場からお墓まで運ぶこと。やはり、このあいだも大音響で音楽が流され、バンドによる派手な演奏がつくこともある。しゃれた黒服を着こんだ担ぎ屋たちが、棺桶の両わきに立って担いでいく。棺桶をただ運ぶのではなく、エンターティナーとしての磨きあげられたテクニクがここで披露されるのだ。彼らは、重い棺桶を肩だけでささえながら、左右の手を華麗に動かし、リズムカルにステップを踏む。こうして、つぎの日も盛大なお祭りさわぎはつづけられるのである。

ガーナでは、人が死ぬと終わりではなく、そこから新たな人生がはじまると考えられている。ガーナの人にとって、お葬式は故人の死を悲しむだけでなく、その人の新しい旅路を心から祝福するためのものでもあるのだ。

東南アジアの島国、インドネシアのトラジャ族は、ほとんどがキリスト教徒だが、イスラム教や土着の信仰がまじっている。トラジャ族のお葬式は、広場でおこなわれ、村中の人たちが参加し、お祭りのようなイベントとしてもよおされる。近隣の村からの参加者もいて、観光客を受け入れているところもあるようだ。お葬式では伝統的な踊りが披露され、美しい棺が運ばれる。死者の仮の住居がすでに建設されていて、棺はそこへ運ばれるのだ。

お葬式では、水牛が生贄にされる。トラジャ族の伝統的な信仰で、水牛が死者の魂を死後の世界まで運ぶとされているからだ。格式の高い家になるほど、生贄として死者にささげられる水牛の数がふえる。水牛が多ければ多いほど、死者は天の高いところまでのぼっていきけるともいわれている。生贄の水牛、豚、鶏などは、調理されて参列者にふるまわれる。

盛大なお葬式をおこなうには大金が必要になるので、家族は何日も働いて、資金をためるようになるという。トラジャ族の信仰では、死者の魂はお葬式をあげないと、この世から旅立つことができないとされている。そのため、死者は、お葬式の資金がたまるまで、家族のもとでくらすことになるのだ。

遺体は腐らないように防腐処理がほどこされ、それまで住んでいた家のベッドに寝かされる。これは何世紀も昔からつづいている風習だという。遺体の両目は深くくぼみ、肌は黒ずむ。家族は遺体に服を着せ、生前にメガネをかけていた者には、メガネをかけさせる。そして、数か月、場合によっては何年も死者と生活をともにする。ほかの家族と同じように死者のための食事を用意し、体を洗い、着替えをさせる。ごく普通に声もかけ、おさない子どもたちも怖がることなく、「おじいちゃん、ご飯だよ」「お客さんがきたよ」などと話しかける。お葬式がよおされるまで死者とともにくらすことで、家族は身内の死を少しづつ受け入れていくのだともいわれている。

日本でも、仏壇やお墓にむかって話しかけることがある。「今日はこんなことがあったよ」「娘が学校で表彰されたよ」などと言って、手をあわせたりもする。だから、ちよつとドキリとさせられるトラジャ族の風習も、独特すぎるとはいいきれない。現代の日本のお葬式は、核家族化や経済的な理由などから簡素になり、お見送りの方法も多様化している。故人の希望をかなえて、遺灰を海にまく海洋散骨や、遺灰をロケットで打ち上げて宇宙にまく宇宙葬などもおこなわれている。

死者の葬り方はさまざまだが、見送る人の故人への思いは、それほど変わるものではないのかもしれない。